令和六年度

麗澤瑞浪に学んで

麗澤瑞浪中学・高等学校

Reitaku Mizunami Junior and Senior High School

発刊にあたって

校長　藤田 知則

この「麗澤瑞浪に学んで」は、六月に行っている「伝統の日・感謝の集い」での発表原稿、生徒寮で開かれる体験発表会での発表原稿、高校三年生卒業時の「麗澤瑞浪に学んで」など、本校の活動の中で綴られたものを纏めたものです。

近年、平和だと思ってきた日本でも、短絡的で悪質な事件が頻発しています。未来ある若者たちが、安易・軽率な気持ちで「闇バイト」に応募している事実に驚くと共に、非常に悲しい気持ちにもなります。また大人の責任も感じます。おそらく、育ちの中で、知恩・感恩・報恩という言葉や概念を一度も聞いたこともないのでしょう。大きな恩恵によって自分が生かされている存在だと認識すれば、さまざまな選択が変わってきたはずです。改めて、道徳教育の重要性を感じ、私たちの学校の使命を再確認させてもらう日々です。

本校は、昭和三十五年に、全寮制の学校としてスタートしました。現在でも、多くの生徒たちがキャンパス内で寮生活を送っています。個を尊重することは大切ですが、同時に社会性や道徳性を身につけさせるためには、多様な人間関係の中で学ぶ機会や、その中で葛藤する体験は必要不可欠です。親元を離れ、地元を離れ、多様な背景を持つ仲間と、少し不自由な生活を送る寮生活は、今の時代にこそ価値が高まっていると感じています。他人との関わりなしでも成立する自己存在感ではなく、他者の存在や他者との交流により育まれる「自己有用感」を獲得することの方が大切なのです。「自己有用感」を獲得することは、地域のため、国のため、世界のために自分の力を発揮したいという考えの基本となるからです。

現在のような国難とも言えるこのような事態にこそ、国家、社会の発展と人々の安心、平和、幸福の実現に寄与できる人物を育成する教育がより一層必要とされていると強く実感しています。その効果の一端を生徒の作品から感じとっていただけたら幸いです。

第一部　伝統の日　感謝の集い

祖先とのつながり

3年　中島 健太

皆さんは「伝統」というとどのようなものを思い浮かべますか？きっと様々なものを思い浮かべると思いますが、共通点は「長く続いている」ということだと思います。

長く続いているものには理由があります。例えば、授業や夕礼の前に行う黙想は、今では当たり前の習慣ですが、これを行っている学校は珍しいと思います。休み時間と授業の切り替えができ、集中力を高めることができます。だからこそ私たちの先輩はこの黙想という習慣を続けてきたのだと思います。

僕の家でも続いている習慣があります。僕の祖父母の家が群馬県にあり、長期休みの際には必ずお墓参りに行っています。幼い頃、僕はなぜお墓参りに行くのか、母に理由を聞きました。すると母は「お墓参りに行くのは、自分たちまで命をつないでくれたご先祖様に感謝を伝えるということだよ。」と言いました。

また、「自分が成長したことを報告する意味があるんだよ。」とも言ってくれました。僕はすぐには理解できませんでした。しかし、成長するにつれてその意味が分かるようになってきました。

小学校のころはあまり感じませんでしたが、麗澤瑞浪に入学してから身のまわりのことを自分でするようになって、家では親が大変な思いをして面倒を見てくれていたことがわかり、感謝の気持ちを持つようになりました。

そして僕のお世話をしてくれている両親にも子どもの頃があり、親から面倒を見てもらっていたはずです。親にもその親である祖父母がいて、祖父母にもまた親である曾祖父母がいて、そのつながりの先に自分がいることがわかりました。そうすると、お墓参りをしてご先祖に感謝を伝える大切さがわかったような気がしました。

僕のご先祖様は何百人、何千人にもなります。例えば十代遡るとご先祖様の数は千二十四人にもなります。それらの先祖についてすべて調べることはできませんが、今回の作文を書くにあたって、僕のご先祖にはどんな人がいたのか、気になって調べてみました。

僕の曾祖父は中学校の美術と社会の教師をしていました。最後は校長先生になったそうです。近所の鉄工所に行って鉄パイプを溶接して作品を造り、賞を取ったことがあるそうです。僕の家にも曾祖父が描いた絵があります。その曾祖父がいなければ、今僕はここにいない、と思うとまた改めて祖父の絵をじっくり見てみたいと思いました。

家のことだけでなく、長く続いているものには意味があると思います。昨年、日本文化体験で陶芸を体験しました。今までやったことはありませんでしたが、実際に自分の手でお皿を作ってみて、陶器に対して思い入れができました。それは土の練り方一つ取っても先人の知恵が詰まっていると感じたからです。

現代は便利になりすぎて、先人からのつながりをつなぐという意識が薄れてきているように思います。陶芸以外にも古くから続いているお祭りなどの行事には、それぞれ意味があり、僕たちはそこから恩恵を受けています。私たちは、まず自分が受けている恩恵について知ることが大切だと思います。そうすることによって、先人とのつながりをより意識することができるのではないでしょうか。

僕にはまだまだ他にも気づけていない恩恵があるはずです。僕は日頃恩恵を受けているものに気づいて、感謝できるようにしていきたいです。

父母の心

6年　朝比奈　琴美

「父母の心をもって人類を愛す」

この格言を聞いて、皆さんは何を、誰を思い浮かべますか。私が初めてこの格言を聞いた際に思い浮かべたのは、両親、そして祖父母を始めとするご先祖様でした。しかし、この麗澤瑞浪で様々なことを経験し、学んだ結果、私は両親のほかに3つの人物像に心当たりができました。

一人目は、私の曾祖母です。私の祖母は早くに母親を亡くし、父親が再婚して新たに母親となったのが私の曾祖母でした。ですから曾祖母と祖母は、血のつながりはありません。しかし、曾祖母は祖母のことを実の我が子のように思い、愛してくれたそうです。毎週水曜日に二人で一緒にお墓参りに行ったり、孫である私の父と共に卓球をして遊んでくれたり、水泳を教えてくれたり、それでも時にはしっかりと厳しく叱ってくれたそうです。また、今でこそあまり会えていませんが、ひ孫の私にも優しくしてくれたことをよく覚えています。父母の心を抱くのに、血がつながっているかいないかは、きっと些細なものなのだな、と実感することができました。

二つ目は、皇室の方々です。日本の天皇は世界で一番古い君主です。つまり、世界で一番長く続いている王様です。長く続いている理由は、どの時代の天皇陛下の方々も私たち国民のことを一番に考えて行動してくださっていたからではないでしょうか。最近ニュースで耳にする話では、愛子様が国民のことを思い、成人の際に歴代の方々がお金をかけて作っていらっしゃったティアラを新調されず、道徳や歴史で習った話では、第二次世界大戦の際に昭和天皇が自らの命を犠牲にしてまで国民のことを救おうとしてくださったことなど、どのエピソードも我々国民を我が子のように思い、行動していらっしゃるものばかりでした。みなさんにもいくつか思い当たるエピソードがあるのではないでしょうか。

三つ目は、麗澤瑞浪で会えた私たち後輩のことを思い、時に優しく、時に厳しくしてくださった先輩方です。私が初めて先輩になったとき、後輩に注意することの大変さを、身をもって痛感しました。なぜなら、どれだけ相手のことを思って注意しても、一度の注意で相手に嫌われてしまうことはあまり気持ちの良いものではないと同時に、よくある話でもあったからです。以前、私も少しずれた行動をしてしまっている後輩に「このときは、こうするんだよ」と声をかけた際に、少し疎まれてしまったことがあります。誰しも人に嫌われることには抵抗を覚えるものだと思います。それでも先輩方は、ダメなことはダメ、

とその都度私たちに教えてくださいました。特に、中学一年生の頃は沢山のルールの中で生活をしなくてはいけなかったため、まだ覚えきれていなかった頃は同じ間違いを繰り返してしまったことがあります。しかしその時も先輩方は優しく声をかけてくださいました。この時に初めて、私は父母の心を抱くのに血のつながりなど関係はないと気づけたような気がします。そして、今では最高学年となり、私たちは後輩たちに寄り添うとともに注意することが増えました。今でも、後輩に注意することは少し億劫になってしまいますが、歴代の先輩方を見習い、後輩たちのことを思って、父母の心をもって、注意しようと思うことができています。

このようなことに気づくことができたのは、麗澤瑞浪で良い先輩方や先生方、同級生たちに恵まれたからだと思います。このことを忘れずに、私が受け継いでいるこの命や、平和な国・日本や、私を成長させてくれた麗澤瑞浪を未来につないでいけるよう、残り少なくなってきた寮生活・学校生活を皆で楽しく、前向きに過ごしていきたいと思います。

第二部　生徒体験発表会

【男子寮】

ルールの意義

Ａ４寮　６年　平野　秀悟

私は六年間寮生活をしてきました。初めは慣れないことばかりで、多くの失敗をしたり、友達と喧嘩をしたりもしました。また中学寮では、就寝時間などとても多くのルールがありました。

そして、中学三年生の三学期に高校寮に入り、中学寮との違いに驚きました。例えば、部屋が個室になり、最終消灯時間が二十四時になったことなどです。そして、自由も増えました。しかし同時にそれは、自分のことを自分で決めなければならない、ということでしたが、当時の私はそのことに気がつかずに、自由を謳歌していました。

そんな私が、ルールが減ったほうが生活は難しいと気がついたのは四年生になってからでした。その理由の一つとして、自習体制が挙げられます。中学寮では、平日の自習は、毎日学校で行なっていたのに対して、高校寮では、学校自習と寮自習とが交互に行われるようになりました。それにより、チューターの先生が自習監督をしている日も減り、自習時間中の強制力も弱まり、自分の意志の力が重要になりました。今まで、先生達が監督しているという緊張感から勉強していた私は、欲に負けてサボってしまうことがありましたが、授業の難化により、サボっていられる余裕もなくなりました。他にも、先程述べた消灯時間の延長に伴い、生活リズムも自分で決定しなければならなくなりました。

このように、中学寮と高校寮のルールには大きな違いがあります。中学寮では、このルールを守ってさえいれば、人とトラブルになることは殆どありませんでした。その理由として、ルールがその集団の基準となっていたからです。しかし、高校寮ではルールが大幅に減り、集団の中の基準がなくなり、相手への気遣いや、寮生間のコミュニケーションによる、自治の部分が増えました。就寝時間一

つとっても、点呼後すぐに寝る人もいれば、二十四時ギリギリまで起きている人もいて、生活リズムも人によって異なり、就寝までの時間の使い方にも違いが生まれてきます。そうなると、当然それぞれの主張も大きく変わってきます。その際に、相手のことを気遣う心や、当事者間の話し合いが大切になってきます。

私は、そのことに気がついた時に、初めてルールには、違う人間同士が生活する中で、争いを防ぐための役割があることを実感しました。そして、高校寮ではそのルールが減ったことで、相手を気遣う心の重要性を知り、身につけることができました。この力は、大学や社会など、一生を通して使える力だと思うので、卒業した後もこの麗明寮で学び、感じたことを忘れずに生きていきたいと思います。

繋がりに感謝する

A6寮　6年　高橋　真之

麗澤瑞浪での生活も残りわずかとなりましたが、六年間を振り返ると本当に多くの方々の支えの中で、さまざまな学びを得ることができたと感じています。特に寮役員を務めさせていただいたこの一年間は、日々葛藤しながらも自分が大きく成長できた一年でした。

私が最も成長できたと感じるのは、人との繋がりに感謝できるようになったことです。リーダーシップやコミュニケーション能力など、さまざまな点での成長を実感していますが、それ以上に、この気づきこそが私が最も成長できた部分だと思っています。さまざまな課題に直面したり悩んだりした時、多くの方々の支えを受ける中で、人との繋がりに気づくことができました。

寮が始まった当初、寮の運営や後輩との関わりについて深く悩んでいた時、相談に乗ってくださったのが、前年度私の寮の寮長を務められた先輩でした。ご自身の経験などから多くのアドバイスをいただけたことが、今年一年間を前向きに過ごせた大きな要因になったと思います。寮では、そういった縦の結びつきが強いことも一つの特徴だと思います。おそらくその先輩もまた、他の先輩に教わり、その方もまた先輩に教わり、半世紀以上続く伝統が形を変えながら受け継がれ、今の私たちを支えてくださっているのだと思います。そういった先輩方から受けた恩を感じると同時に、私自身が後輩たちに何かを残していく役目があると実感しました。

目には見えない人の支えという意味では、環境の整備をしてくださっている寮務職員の方や施設課の職員の方をはじめとした寮の管理に携わってくださる方々も同様です。そう言った方々の支えを知り、感謝の気持ちを忘

れずに生活することができました。

また、同じ寮や部活動の保護者の方々にも、さまざまな場面で支えられ、応援していただき、まるで本当の親のようにこの六年間、私たちの成長を見守ってくださいました。そして、最も近くで私たちを支えてくださったのが、チューターの先生をはじめとした教職員の方々です。時には厳しく、時には優しく、大きな愛情を持って私たちに接してくださいました。先生方の言葉一つ一つが今の私を作ってくださったのだと思います。

「父母の心を持って人類を愛す」という格言がありますが、本当に多くの父母の心を持った方々に出会い、支えられてきたと感じています。そして何よりも、私たち三人の兄弟を生み育ててくれた両親に感謝したいです。常に私たちのことを想い、どんなことにも応援してくれて、自分たちの選択をいつも尊重してくれました。二人の存在が私たちの大きな支えであり、目指す目標です。

この六年間を通して、多くの方々との繋がりの中で支えられていることを自覚し、感謝の気持ちを持つことの大切さを学びました。

【女子寮】

心の成長

B2寮　6年　永治　花佳

六年間の寮生活も残りわずかとなり、寂しさを強く感じています。振り返ってみると、楽しかったこと、悲しかったこと、頑張れたこと、つらかったことなど、さまざまな思いと経験をしてきたとても濃い六年間でした。その六年間の寮生活を通して、私が得た最も大きなものは、「心の成長」だと思います。これは、勉強や部活動などの学校生活から得た学びとは異なり、道徳を大切にする麗澤瑞浪の寮だからこそ得られた、かけがえのないものだと思います。

これまでの寮生活の中で、数え切れないほど多くの人に助けられ、支えられてきました。入寮してから先輩方には、寮での生活のこと教えていただいたり、相談にも乗っていただいたりして、たくさん助けていただきました。自分も先輩になるにつれて、助けてくださった先輩方のように誰かを支えられる存在にな

ろうと思うようになりました。そして、誰の役に立てるようにはどうしたら良いかを考えて行動することを心がけながら生活してきました。

そんな中、ある日の夕礼で先生の「誰かの幸せを願うことは心を遣うことであり、それを日々続けることで心を鍛えることができる」と言うお話を聞き、はっとさせられました。誰かのためにと思ってしてきたことが、心を遣って心を鍛える「心の成長」という形で結果的に自分に返ってきていたということはそれまで考えていなかったことでした。「他を救うにあらず己を助くるにあることを悟る」という言葉の通り、他人を助け、他人のことを思うことで自己の品性が向上し、自分にも周りにも良い影響をもたらすことに繋がるということ、このことを知ってから、心を成長できるこの環境に改めて感謝し、これまで以上に他人を思いやって心を成長させていきたいと思いました。

また、支える側として周りがよく見えるようになったことで、今まで気づいていなかった私を支えてくれていた存在に気づくことができました。私を信頼してくれている仲間や後輩、先生方、寮という温かな環境も、それらの存在一つ一つが大きな心の支えとなっていました。

人との関わりが薄くなっているこの世の中で、寮生活という濃い時間を過ごし、心を成長させることができたことは私の人生の中でかけがえのない経験です。かけがえのない仲間との出会い、かけがえのない思い出を得られたことにも感謝しています。これから先、行き詰まることがあっても、この場所で得た大切なものを糧に頑張っていきたいと思います。

自らの運命の責めを負うて感謝す

B3寮　5年　森田　さくら

私がこの作文を通して伝えたいことは、格言にもある、自らの責めを負うて感謝す、です。これはどんな困難に直面しても悲観的になることなく、その起った困難には感謝しなさい。という意味の格言です。

自分で言うのも少し変ですが、私は中学生のころ、先輩や先生、同級生や両親から見てもすごく生意気で聞く耳を持たない厄介な生徒だったと思います。今でも多少そのような面があるかもしれませんが、今日は私がそこから少しでもまともな人間に成長できた理由をお話しします。

まず私が成長できた一番お理由は、ある先輩に出会ったことです。その方はもう卒業されていますが、その方と同じ部屋になった時

に、「この方はすべてにおいて弱みを見せない、素晴らしい方で私とは真反対な方だ」と思い、「仲良くなりたい」「どうしたら良く思ってもらえるだろう」と考えていました。そう思うことで自然と周りを見る力、寮でのルールを守ることの大切さ、などたくさんのことが身についたと思います。また、後輩や先輩、同級生などのことを観察して、小さな変化でも気づくことができるようになりました。そして今では、先生や先輩方、同級生から「成長したね」と言ってもらえることが多くなりました。

その時から、私はルールを守られていない後輩を見るとすごく嫌な気持ちになり、今までの先輩方の気持ち、注意する大変さ、注意してくださることへのありがたさを感じることができるようになりました。おそらくその方と出会っていなかったら今の私はいないですし、こんなこともできなかったと思います。私を変えてくださったその先輩はもちろん、私にそのような環境を与えてくれた両親にも感謝しています。

二つ目の理由は家族の存在です。私が中学生のころ、すべてがうまくいかず、精神的にしんどい時期がありました。その大半が同級生との人間関係が原因で、寮や学校、部活でいろいろあり、とても思い悩んで、本気で学校を辞めようか悩んでいました。そんな時私は両親に連絡をし、相談して、学校を辞めたい、学校に行きたくないと言い続けました。その時私の両親は家に帰らせてくれず、帰省したとしても、このまま家にいていい、などという甘い言葉はありませんでした。

今ではその時の両親の選択にとても感謝していますが、その当時の私は学校を休ませてくれない両親を恨んでいました。しかし私の両親は精一杯の私への応援をしてくれていたのだと気づきました。その当時私の両親は毎週のように私を迎えに来てくれて、話を聞いてくれていたのです。

もし私がそこで家にずっと帰って学校に行かない選択をしていたら、きっと私はここまで強くなれていなかったと思いますし、学校もそのまま行けてなかったと思うので、私を学校に行かせる選択をしてくれた両親に対して本当に心のそこから感謝しています。またそのしんどかった時期がなければ、何も成長せずに終わってしまっていたと思うので、その時たくさん悩ませてくれた同級生にも感謝しています。

本題に戻りますが、私が最初に話した通り、「自らの運命の責めを負うて感謝す」の気持ちが大事だということを、寮生活の経験を通して実感しました。人生、生きていれば理不尽な状況、いろいろな困難にぶち当たることはたくさんあります。しかしどれだけ悔やんだり憎んだりしても、私たちは超能力者ではないので、すでに起こったことを変えることはとうてい無理です。ならば自分自身のマインドや意識を主体的に変えることが唯一の方法なのです。世の中には、すべてが思い通りになる人はほとんどいません。だからこそ少し諦めて自分を変えていることがとても大切です。それが結果的に自分を成長させることにつながると思います。

これからは、物事が起こった際には、その経験が自分を変えるためのチャンスだと思って生きていこうと思います。この姿勢が私の人生をより充実させ、成長へと導いてくれると確信しています。

【部活寮】

学び

テニス部寮　6年　山﨑　正二朗

私が入寮してから二年六ヶ月という月日が経ちました。私がこの寮生活を通じて、周囲に気を配ることを学び、協調性やコミュニケーション能力、広い視野を身につけることができました。また、自分の感情をコントロールすることができるようになりました。

私は入寮まで、非常にマイペースな性格だったため、周囲に合わせて行動することが苦手でした。周囲から「変わっている」と言われることがありましたが、当時は全く気に掛けていませんでした。

入寮して、先輩方や同期の五人と集団生活をしていく中で、周囲に合わせることの必要性を実感するようになり、周囲に気を配ることを学び、意識して生活していくようになりました。そうすることで、私は協調性を身につけることができました。

私が五年生になり、後輩ができたことで教えること、指示を出すことが増えてきました。その中で、全員が同じ伝え方をした時に、全員が同じ理解を得られる訳ではないことを学びました。一人一人に合った言い方、方法を伝えていくことが必要だと感じました。一人一人に合った伝え方していくためにはどうすればいいのか、試行錯誤の繰り返しでした。どうすれば良いのか考え、言葉にして相手に伝えていくうちに、私はコミュニケーション能力を高めていくことができました。

五年生の冬から寮長になり、寮全体をまとめていく立場になりました。寮生活を円滑に進めていくためには、周囲を見て、先のことを考えて行動していかなければならないことを学び、常に先のこと、周囲のことを考えて生活を送るようになりました。また、時に自分の感情よりも優先しなければならないことがあることも学びました。こうした学びを経て、私は広い視野と自分の感情をコントロールする力を身につけました。

これらの力は、テニスをしていく上でも大いに役立つものとなりました。テニスは、常に冷静でいなければなりません。プレー中に感情的になってしまいそうな場面が何度もありましたが、寮生活で培った感情をコントロールする力が助けになり、冷静さを取り戻すことができるようになりました。また、広い視野のおかげで相手のプレーの特徴に早く気づくことができ、コミュニケーション能力と協調性のおかげで早く練習メニューを決め、同じコートの人と早く練習に取り組むことが

できるようになりました。これらのテニスの体験を通して、より力を向上させることができました。

このことから、私は周囲に気を配ることや協調性、コミュニケーション能力、広い視野、自分の感情をコントロールする力を身につけることができました。大学に進学し、これらの力をより伸ばしていけるように努めていきたいです。

第三部　修学旅行

台湾研修から得られた学び

5年1組　松本　伊生

私は小さい頃、世界の名画が収録されている図録を父に買ってもらったことをきっかけに、世界の美術史に興味を持つようになりました。そこで美術が好きな人なら必ず一度は訪れたいと思うであろう世界四大博物館の一つ、故宮博物院へ行けたことが今回の研修旅行の中で特に印象に残る思い出となりました。

故宮博物院の代表的な作品である、翡翠でできた白菜と瑪瑙でできた豚の角煮をこの目で見てみたいと思っていたのはもちろんですが、私は故宮博物院を訪れたら二作品と同じくらい必ず目にしたい作品が一つありました。それは赤壁図鑑という作品です。私は、美術史の中でも絵画の部門に特に興味があるのでこの山水画は必ず見たいと思っていました。北宋文化を代表する作品をこの目で見られた感動はきっと一生忘れることのないものになったと思います。

故宮博物院にいた時間は長くはなかったので、見足りなかったというのが本音です。しかし、まだ知らないことわからないことばかりの、十六歳の感性で世界を代表する作品やその作品が生まれた背景、歴史に触れられたことは私の人生にとって大きく意味のある時間でしたし、一生の財産となりました。

そして私は台湾を訪れるのは初めてだったので、町に建っているマンションなどの新しい建築物もお寺などの古き良き建物も作りが日本と異なっているものばかりでとても興味深く面白いと感じました。異文化の中で気づく日本の良さ、台湾の良さ、実際に訪れてみないとわからない、写真やインターネットや本などでは得ることのできない発見が多くありました。そういった新たな発見もとても印象に残る思い出となりました。

高校の修学旅行で海外に行けることのありがたさを身にしみて感じたし、台湾に行けてよかったと心の底から思っています。これからもいろんな国を訪れて、その国の文化や歴史に触れてもっともっと自分の中の知識の幅を広げていきたいです。

そしていつかはまた台湾を訪れて、十六歳で見た景色と今よりもおとなになってから見る景色の違いを照らし合せてみたいです。

台湾研修で学んだこと

5年2組　後藤　将太

僕が台湾で学んだことは多くありました。この研修旅行を通して、文化や歴史、人とのつながりの大切さを感じるものになったと思います。

まず、台湾の街並みや自然の豊かさに驚きました。自然豊かな山の中にある十分や台北市の賑やかな都会の雰囲気まで様々な風景を見ることができました。台北一〇一付近は都市化が進み、その景色は東京や大阪などの日本の都市とあまり違いを感じませんでした。それぞれの場所には独自の歴史や背景があり、それを知ることで台湾の文化がより深く理解できたように思います。

また、台湾の人々の温かさにも驚きました。九份や台北での買い物中に親切に話しかけてくれる人たちや、地元の人達の笑顔は、とても心に残っています。お土産をおまけしてくれる人もいました。言葉が完全には通じなくても、相手を思いやる気持ちや優しさがあれば、心はつながることを実感しました。

さらに、歴史的な場所を訪れたことで、台湾と日本の関係についても深く考える機会になりました。烏山頭ダムや故宮博物院を見学した際には、日本が台湾に与えた影響とその後の歩みを学びました。過去の出来事を知ることで、異文化理解の大切さや歴史を受け継ぎ、よりよい未来を築いていくための責任について考えるきっかけになりました。

食文化も大きな学びのひとつでした。昼食や夕食で食べた小籠包や、甘みが強いフランクフルトなどの台湾独特の料理はどれも美味しく、文化を身近に感じることができました。食べ物ひとつひとつに地元の人達の工夫や誇りが込められていて、それらを通じて台湾の暮らしを垣間見ることができました。

台湾研修旅行での経験は普段の授業の中では学べないことが多くありました。異文化に触れることで自分の視野が広がり、世界を見る新しい視点を得ることができました。この研修旅行をきっかけにこれからも様々な国や文化に触れていきたいという思いが強くなりました。これから先、グローバルな社会になっていく中で、今回の研修の経験を今後の生活に活かしていきたいです。

初めてばかりの修学旅行

5年3組　眞武　里帆

今回、私にとっては初めての海外旅行、初めての飛行機、初めての外貨、などとたくさんの初めてを経験することができた修学旅行でした。台湾に行く前は人から聞いた話や偏見などで不安が大きかったですが、実際にいってみるとその不安や心配がほとんど必要ないほど素晴らしい思い出ばかりが積み上がっていきました。その中でも特に印象に残っていることは二つあります。

一つ目は台湾には優しい人が多いということです。一日目の九份や三日目の自由行動では自分たちで自由にご飯を買って食べるという時間があったため、少しだけですが、実際に現地の方とお話しする機会がありました。その中で多くの人が私達と目線を合わせて最後まで話を聞いてくださったり、言葉に詰まっていると質問をしてくださったり、日本語で話してくださったりしました。当たり前のように思えますが、初めての海外で不安ばかりだった私にとってはすごく心が温まる体験で、とても安心して台湾での三泊四日を過ごすことができました。

二つ目は食文化の違いです。台湾に行く前は台湾といえばタピオカと小籠包と台湾かき氷の印象しかなく、他にどんな食べ物があってどんな味がするのか全くわからないままでした。実際に現地にいってみて、有名なタピオカや小籠包、台湾かき氷はもちろん美味しかったですが、昼食や夕食で食べた牛肉麺や酸辣湯などもとても美味しかったです。現地の料理の中で特に印象に残ったのはエリンギです。訪れたほとんどの場所でエリンギの揚げ物や、肉のように味付けされているエリンギなどが売られていたり昼食や夕食で出てきたりしました。どの味付けでもとても美味しくて日本ではサブ的な使われ方をするエリンギがここまで主役になれるのか！ととても驚きました。台湾で食べた中には八角などの香辛料が強く、あまり私の口には合わないものもありました。しかし、これも日本にいたら経験できないものなので食べることができて良かったです。

ここに上げたこと以外にも「十分での天燈上げ」や「九份の町並み」「八田與一が建設に貢献した烏山頭ダム」などとても心に残る体験がたくさんできました。また、現地にいってみないとわからない台湾の良さや台湾と日本の繋がりをたくさん知ることができました。今回の修学旅行を通して、偏見や聞いた話だけを信じて行動するのではなく、実際に自分で取り組んでみたり現地に足を運んでみたりすることがとても大切だと感じました。これからもこの経験を活かし、たくさんのことに挑戦していきたいと思います。

第四部　皇居勤労奉仕

5年　安藤　遼太朗

今回、皇居の清掃奉仕活動に参加して僕は日本の歴史や文化、そして自然の大切さを改めて感じました。この四日間を通して皇居に少しでも関われたことを誇りに思います。一日目は靖国神社の参拝や聖徳記念絵画館の見学をして、日本の歴史の深さを感じました。この日を通し、奉仕への意識が高まりました。二日目からは本格的に奉仕がスタートしました。この日に私たちは天皇陛下にお会いすることができました。周りは皆緊張したと言っていましたが、私はその逆で緊張が解けると感じました。陛下にはオーラのようなものがあると感じました。三日目は皇居内の中庭のような場所の清掃をしました。シーサーのような石像や室内にある大きなシャンデリアを見ていると、細かい手入れによりこの美しさが保たれていると感じました。最終日は引き続き皇居の見学をした後、清掃をしました。最後だということもあり、とても張り切ってしまいました。今回の奉仕活動を通して、日本の歴史に対しての苦手意識が薄れ、興味が出てきました。この経験は忘れないようにしていきたいと思いました。

5年　片田　愛珠

最初は皇居のことも天皇陛下のことも何の知識もありませんでした。事前授業では少しだけ皇居などのことを知ることができましたが、なかなか実際の想像をすることができませんでした。実際に来てみると別の世界に来たように思えました。皇居内には天皇陛下がいらっしゃるだけではなく、宮内庁の方や総務課、庭園課の方などさまざまな方がいて、その方々のおかげできれいで安全な皇居が保たれていることが分かりました。落ち葉掃除はとてもやりがいがあって、みんなと協力してできたのがすごく楽しかったです。そして何より天皇陛下にお会いできたのがうれしかったです。天皇陛下はとても優しい声で緊張をほぐしてくれるような安心感のあるとてもすてきなお人柄でした。参加してよかったなあと思ったし、今年一番感動しました。これからも天皇陛下をはじめとした皇室の方々のおかげで幸せに暮らせているということを心にとめておきたいです。また、皇居奉仕のように家や学校での掃除も自主的にがんばりたいです。

5年　早川　和沙

この四日間は本当に思い出に残るものとなりました。一日目は、多摩陵、武蔵野陵、靖国神社、聖徳記念絵画館へ行きました。多摩陵、武蔵野陵は想像以上に立派で驚きました。靖国神社では本殿で参拝をさせていただき、聖徳記念絵画館では教科書に載っている絵を見ることができて本当に貴重な経験となりました。二日目は乾通りを掃除し、天皇陛下にご会釈を賜りました。他にも四五〇年前から育てている盆栽や一般の方は入ることができない賢所に案内していただき、心に残る一日でした。三日目は宮殿の中庭の掃除をしました。テレビなどで何度か宮殿を見たことがありましたが、想像以上に大きくて圧倒されました。中庭もとても素敵なところで、そこを掃除させてもらえたのがうれしかったです。この日は四日間の中で一番楽しい日でした。四日目

は一般の人が自由に出入りできるところを掃除しました。池にいたヒレナガニシキゴイがとても素敵でした。掃除をしていると外国人に話しかけられたり、最後に佐野さんに案内していただいたりして、とても楽しい一日でした。このような貴重な体験ができたことを誇りに思い、これからの人生に生かしていきたいです。

5年　松原　春花

個人的に一番記憶に残っているのは、賢所まで入らせていただいたことだと思います。ほとんど使われなくても、一般の方が入れない場所であっても、丁寧に手入れされていることがいろいろなところから感じられたのが本当にすごいと思いました。また、天皇陛下からご会釈を賜ったことも印象に残っています。人それぞれ感じたことはあると思いますが、私は天皇陛下が室内にお入りになられたときに、天皇陛下の穏やかな空気感に肩の力や緊張が抜けるような感じがしました。皇居勤労奉仕全体を通して私が感じたことは、皇居全体が日本の歴史を表すようなものなのだろうということです。日本の建築様式や生きてきた人々の人生、ずっとつなげられてきた伝統が今もなおさまざまな人の手によって大切に守られ、次代へとつなげられていこうとしているのが皇居で働く方々やさまざまな場所から感じられました。さまざまな人が関わりながら大切に守られてきた皇居の維持に、ほんのわずかな時間、微力ながら関わることができたこと、とても誇りに思います。この貴重な経験を忘れずに大切にしていきたいです。

皇居勤労奉仕記念　於：皇居宮殿東庭　令和6年12月24日

第五部　六年生　麗澤瑞浪に学んで

麗澤瑞浪に学んで

6年2組　加藤　樹真

私は麗澤瑞浪での三年間の高校生活を通して、「見返りを求めてはいけない」ということを部活動の顧問の先生の言葉から学ぶことができました。そして、この考え方が私を大きく成長させることに繋がりました。

私は高校男子テニス部に所属していました。日々部活動に打ち込んでいましたが、部活動の時間以外にも自主練習やランニングをすることを続けてきました。四年生の頃は、「これだけ努力すれば結果は出るだろう」と思っていました。しかし、なかなか結果を出すことができず、悔しい日々が続きました。周りの仲間は結果を出しているのに、どうして自分は結果が出ないのだろうと思うようにもなりました。

そんなとき、顧問の先生から、「努力をすることに満足してはいけない」と言っていただ

きました。私はこの言葉を聞いたとき、「自分は努力をすることに満足していた」ということに気づき、今までの自分の努力に対する考え方を見直すようにしました。そして、自分の弱いところを認め、「結果が出るかは分からないが、自分を成長させるために努力をしよう」と考えるようになりました。

そこから私は、見返りを求めずに練習に取り組み、またチームが勝つためにサポートをするようにしました。すると、五年生の夏から少しずつ結果が出るようになり、全国選抜テニス大会では団体戦三位という結果を残すことができました。結果が出るようになったのも、あの時の顧問の先生の言葉のおかげで自分の努力に対する考え方が変われたからだと思います。また、この考え方をテニスだけでなく、学校生活や寮生活でも活かすことができるようになりました。決して褒められたいからというのではなく、周りの人が過ごしやすいようにするために、トイレのスリッパを揃えることや黒板をきれいにすること、落ちているゴミを拾うということができるようになりました。

これらの経験から、見返りばかりを求めていては自分を成長させることはできないということを学ぶことができました。これからも高校生活での経験を活かして、見返りを求めるのではなく、自分が人として成長し、周りの人が過ごしやすくなるために行動していきたいと思います。

麗澤瑞浪に学んで

6年2組　多田　雪音

「絶対に感謝を忘れるな」この言葉は私が尊敬する部活動の顧問の先生の言葉です。私はこの言葉のおかげで大いに成長することができました。

私は幼少期のころ、人にされるのが当たり前だと思っており、物事に関してあまり感謝を感じたこともしたこともありませんでした。

そんな私が麗澤瑞浪に入学し、太鼓部に入部しました。小学校のクラブ活動とは違い、先輩を敬う姿勢や返事、挨拶などの規律がしっかりしていて一切気が抜けず苦労しました。特に、先輩方や顧問の先生が話された後や、なにか教えていただいたときなど様々な場面でお礼を言う機会が多く、何故こんなに言わなければならないのだろうと疑問に思いつつ従っていました。そんな生活が続く中、初めて舞台で演奏できるチャンスがやってきました。私は絶対に出たいと思い、無我夢中で練

習しました。何度も先輩にアドバイスしていただきましたが、全然うまくいかず、苛立ち、自暴自棄になってしまいました。そんな時、顧問の先生が「今、私達がここで活動ができていること、舞台に上がれること、応援してもらえることは、全て保護者の方や卒業生の方々、運営の方々などが支えてくださっているからこそだ。絶対に感謝を忘れるな。」とお話されました。私はこのとき、今までの自分を思い浮かべながら聞いていました。そこではっとしました。これまで私はなんて失礼なことをしていたのだろうと気が付き、心から反省しました。そこから私は心を入れ替え、何事も感謝の気持ちを忘れずに練習を積み重ねていきました。その結果、初めての舞台に上がることができました。私はこのとき、顧問の先生が仰っていた言葉を思い出し、心から深い感謝の念を覚え、沢山の人に感謝を伝えました。

そこから私は、絶対に感謝をすることを忘れることなく、二度の全国大会と多くの演奏機会に恵まれました。最後の舞台では、感謝の気持ちを強く抱きながら心を込めて演奏をし、無事引退することができました。

その後、些細なことでも必ず感謝を言葉にして伝える習慣ができました。両親になにか買ってもらったり、困っているときに助けてもらったりなど、なにかしてもらったら必ず感謝を口にしています。もう幼少期のように何事も当たり前と感じることがなくなりました。

私は、感謝をする意味を学びました。私を支えてくれた人全てに「有難う」。これからも、何事にも絶対に感謝を忘れないよう生きていきたいです。

挨拶と感謝の言葉の大切さ

6年3組　牧野　亜結

私は麗澤瑞浪で三年間過ごして、挨拶と感謝の大切さを学びました。もちろん、それまで「こんにちは」も「ありがとう」も言ったことがなかったわけではありません。しかし、中学生までの私はそれらの言葉を言うこと、さらにいうと、大きな声を出すこと自体が恥ずかしいと心のどこかでずっと思っていたように思います。また、もともと大きな声を出すことが苦手だったこともあり、挨拶するときも相手にしっかりと聞こえるほどの声は出ていなかったと思います。そんな状態だった私のことを変えてくれたのが、この麗澤瑞浪の環境でした。

まず、挨拶について述べていこうと思います。この麗澤瑞浪に来て最初に思ったことであり、驚いたことが「挨拶がすごいな」ということでした。廊下で誰かとすれ違うと必ず挨拶をしてくれるうえに、生徒間でも先生と生徒の間でも、誰が相手だとしても挨拶をしていました。そんな光景は自分の母校では見受

けられませんでした。最初のうち、私は「返さないのはさすがにいけないし……」という気持ちで挨拶していたため、表情も温かみもないようなものになっていました。しかし、四年生の時、校長先生のお話の中で「挨拶をすることで相手の状態や気持ちを知ることができる。また、挨拶をすることでお互いの心も温かくなる。」という言葉があり、それを聞いてはっとしました。私が今までしていた挨拶では、心が温かくなるどころか相手に冷たいと感じさせてしまうかもしれない。かえって相手を不安にさせたり、心配させたりするかもしれない、普段何気なくしている挨拶にもしっかりとした意味があるのだ。そう思ってから私は、相手の顔や目を見て、笑顔を意識して挨拶することを心がけるようになりました。そうすると不思議なことに、心が温かくなるような、晴れるような感覚になりました。

次に、感謝について述べていこうと思います。私は吹奏楽部に所属していましたが、その活動の一環として、小学校や地域のイベントで演奏することも度々ありました。そんなときに決まって顧問の先生方に言われるのが、「こうやって活動できるのは、家族や地域の方々、先生方の協力や支えがあってこそだから、周りの人々に感謝の気持ちを持ち、伝えなければいけない」ということでした。その言葉には私もすごく共感していました。なぜなら、家族や先生方の協力がなければ活動自体が難しくなり、地域の方にイベントに呼んでいただかなければ、そもそも演奏する機会もなくなってしまうからです。このような気持ちもあり、感謝の気持ちはいつも持っていました。また、麗澤瑞浪では部活動のときだけでなく、日常的に感謝することについてのお話を聞くことが多く、いつも何かがあるとより周囲に感謝の気持ちを持つようになったと感じます。さらに、周りの生徒たちは、よく素直に「ありがとう」と感謝の気持ちを相手に伝えています。私は、そのような姿を見て素敵だと感じ、また、自分ももっと素直に感謝の気持ちを伝えられるようになりたいと思い、行動に移すようになりました。

このように、私は麗澤瑞浪の先生方や生徒の皆さんに影響を受けて、挨拶や周囲に感謝することの意識を変えることができました。また、意識が変わっただけでなく、行動を変えることもできました。ここで学んだ、挨拶と感謝の気持ちを持ち、言葉としても伝えることをこれからの人生でもしっかりと活かしていきたいです。

第六部　卒業式答辞

6年2組　高木　清楓

肌を刺すような冷たい風も和らぎ、山々に春の息吹が感じられる今日の佳き日。本日は私たち卒業生のために、このような温かな卒業式を挙行していただき、誠にありがとうございます。また、お忙しい中、足を運んでいただきましたこと、心より感謝申し上げます。今日、ここで卒業式を迎えられたのも皆様のお力添えがあってこそのことと思います。

先ほどは、理事長先生、校長先生、来賓の皆様、在校生から、温かい励ましのお言葉をいただき、胸がいっぱいです。本当にありがとうございました。それらすべてが皆様から私たち卒業生に贈ってくださったはなむけの言葉と受け止め、深く胸に刻んでまいります。

「ありがとうの反対は当たり前」というある先生の言葉が、今も私の心に深く刻まれています。これまで家族が与えてくれていた安心や安らぎ、そして日々の生活を支えてくれていたすべてのことが、実は当たり前ではなく、有難いものだったと気づきました。この学びは、私が麗澤瑞浪で得た大切な財産の一つです。

麗澤瑞浪で過ごした三年、または六年という月日は、私たち一人ひとりにとって特別な時間でした。特に、親元を離れての寮生活は、緊張や不安との戦いでもありました。寂しさを紛らわせようと必死だったあの日々を思い返すと、今では懐かしささえ感じます。そんな日も同じ気持ちを分かち合える同級生や先輩方の存在が、私に「一人じゃない」と思わせてくれました。それは寮生活において私の何よりの支えでした。

寮生活は決して楽しいことばかりではありません。同級生とぶつかり合い、涙を流した日もありました。何度も寮生活を投げ出したいと思いました。しかし、そのような困難を通して「感謝する心」を学びました。寮では会話の最後に必ず「ありがとうございました」と言います。先生方や先輩方がお話しくださった後や差し入れをくださった後はもちろん、注意を受けた後にも「ありがとうございました」と言うのです。たとえどれだけ嫌な思いをしても、その経験が自分の糧になり、自分を成長させてくれる重要な出来事であるからです。寮での楽しかったことも辛かったことも、そのすべてが私たちを強くし、成長させてくれました。その一つ一つの経験は、今の私にとってかけがえのないものと感じられます。

この麗澤瑞浪という地で多くの経験や忘れられない思い出を作ることができたのは、常にやさしく見守り、支え、応援してくれた家族や先生方、先輩方、そして後輩達のおかげです。皆様にはたくさんのご心配、ご迷惑をおかけしました。私は中学の反抗期を寮で過ごしたため、反抗できる近くの大人は先生しかなく、特に当時のチューターの先生には反抗ばかりしていました。自己中心的な反抗期を思い返せば、本当に恥ずかしく、申し訳な

い気持ちでいっぱいです。そんな私を粘り強く諭し、導いてくださった先生方には言葉では言い尽くせないほど感謝しています。

そして、同級生の皆さん、今まで本当にありがとうございました。麗澤瑞浪で過ごしたこの六年間で最も多くのことを学ばせてくれたのは皆さんです。みんなで一生懸命に案を出しあい、時には意見の衝突がありながらも、みんなが納得できるものをみんなで作り上げた麗明祭。短い練習時間しか取れない競技やぶっつけ本番で練習が一度もないような競技があったり、運動が嫌いでやりたくないと言う人がいたりしても、励まし合いながら一致団結して力を出し合った陸上競技会。思い出を上げていけば切りがありません。みんなで遊んで先生に叱られたり、些細なことでケンカをしたり、時には本当に絶交してしまうのではないかと思うほどの大喧嘩をしたりしましたが、最後にはみんなで笑い合えました。皆さんからもらったものは計り知れません。皆さんのような素晴らしい友人に出会えたことを、本当に誇りに思います。

麗澤瑞浪での三年間または六年間、私たちは多くの方々に支えられて多くの学びを得ることができました。これまで支えてくださった方々への感謝を忘れることなく、麗澤生としての誇りをもち、これからは、それぞれが新しい道を歩んでまいります。新しい環境では多くの不安や困難が待ち受けているかもしれません。しかし、この学校での経験や共に過ごした仲間たちとの絆が、私たちの背中を押してくれると信じています。

最後になりましたが、本日ここに集まってくださったすべての皆様に、卒業生を代表して心より感謝申し上げます。理事長先生をはじめ、校長先生、教職員の皆様、保護者の皆様、そしてこれまで私たちを支えてくださった全ての方々、本当にありがとうございました。皆様のご健康とご多幸、そして麗澤瑞浪のさらなる発展をお祈りし、感謝の気持ちを込めて答辞とさせていただきます。